

佐土原地域の文化遺産 (佐土原地域自治区管内)

【地域の歴史と特色】

佐土原地域は、宮崎市の北部に位置し、地域のほぼ半分を日向灘へと東流する一ツ瀬川によって形成された沖積低地が占めています。

古代の国郡制のもとでは那珂郡に属し、上田島・下田島一帯は「和名抄」に記載される「田嶋郷」に比定されています。また、11世紀後半には、宇佐八幡宮の荘園として、永保3年(1083)に那珂庄、寛治7年(1093)に田島庄が成立しました。それぞれ現在の那珂地区・上田島地区に比定されています。

中世の佐土原は、当初は田島伊東氏、後には伊東惣領家が支配するところとなり、佐土原城跡や大光寺など、佐土原地域の中世の歴史にまつわる貴重な文化財が多数残されています。

江戸時代は、佐土原藩領となり、島津氏が10代にわたって支配するところとなりました。佐土原城の麓上田島に城下町が形成され、明治2年(1869)に藩主島津忠寛が広瀬に転城するまでの間、藩の中心地として発展を遂げました。

【文化遺産マップ】



佐土原地区

さどわらじょうあと

① 佐土原城跡（国史跡）

築城の時期は不明ですが、室町から戦国期にかけては、伊東氏の中心的な城郭として位置付けられていました。天文年間（1532-55）には、伊東氏の家督継承争いのなかで、長倉能登守に擁立された伊東祐吉が佐土原に入城しています。祐吉の死後は兄の義祐（この時は祐清）が佐土原に入城し、晩年に自らの隠居所とするなど、佐土原城を都於郡に次ぐ居城として位置づけました。

天正5年（1577）、島津氏の進攻によって伊東氏が豊後に落去すると、替わって島津家久が入城しました。以後、関ヶ原の戦い直後に幕府領となった一時期を除き、江戸時代を通じて島津氏の支配するところとなりました。

佐土原城は、馬蹄形を呈する丘陵を巧みに利用した山城で、南九州唯一の天守がありました。その後破却され、江戸時代初期には城そのものが麓に移されました。現在は、麓に建設された佐土原歴史資料館で、佐土原地域の歴史や文化について学習することができます。



佐土原歴史資料館（鶴松館）

だいこうじ

② 大光寺

じこくほうでん（もんじゅどう）

📷 自国宝殿（文殊堂）

大光寺は、建武2年（1335）に領主田島伊東氏が檀那となり、岳翁長甫を開山に迎え創建されました。京都東福寺派の寺院として繁栄し、天文11年（1542）には、京・鎌倉の五山に次ぐ十刹の位置に列せられました。

自国宝殿は、文殊堂、仏殿あるいは開山堂とも呼ばれ、中には開山岳翁長甫坐像が安置されています。建物の構造は、棧瓦葺き入母屋造の唐様（禅宗様）であり、建築年代は室町期まで遡ると考えられています。



木造岳翁長甫坐像（一軀）（国重要文化財） ➡

もくそうきしもんじゅぼさつおよびわきじそう
 木造騎獅文殊菩薩及脇侍像（国重要文化財）


運慶（?-1223）5代の孫康俊の作で、文殊菩薩像の底には「貞和4年（1348、北朝年号）」の朱銘が残されています。文殊像は獅子背上の蓮台に乗り、木造寄木造で、彩色、玉眼が施され、右手に剣、左手に巻物を持っています。脇侍には、善財童子像、仏陀波利像、最勝老人像、優填王像を従え、中国五台山へ向かう渡海文殊の姿をあらわしています。



こげつぜんじぶんこつとう
 古月禅師分骨塔（県史跡）

「東の白隠、西の古月」と称され、江戸期禅宗の中興の祖とも呼ばれる古月禅師の分骨塔です。禅師は、佐土原町佐賀利の出身で、10歳で仏門に入り、後に藩主惟久の命により大光寺四十二世住職となりました。禅の教えを広め、多くの俊傑を育てるとともに、庶民の生活善導にも心をくばったため、禅師の人生訓を歌い込んだ盆踊り歌「いろは口説」が作られ、今も町民の間で歌い継がれています。



たじまいとうしくようとう
 田島伊東氏供養塔

伊東氏庶家の田島伊東氏の日向国下向は13世紀中頃といわれています。伊東祐時の四男祐明は、蒙古襲来をきっかけに、すでに伊東氏所領であった田島庄（現在の田島周辺）に下向し、田島氏を称しました。大光寺境内脇に残る4基の五輪塔は、田島氏縁の供養塔と伝えられています。後に大光寺の開基檀那となった田島氏と寺との密接な関係を示す資料の一つとなっています。



こうげついん
 ③ 高月院

高月院は、初代佐土原藩主島津以久の3回忌を機に、慶長17年（1612）に2代藩主忠興によって創建されました。寺名は、以久の戒名「高月院殿前典厩照誉崇恕居士」に因んだものです。以来、藩主の菩提寺として保護を受け、墓所には藩主や正室、側室などの墓が立ち並んでいます。



佐土原藩島津家御廟所（高月院）（市史跡）

てんしょうじあと

④ 天昌寺跡

天昌寺は、鹿児島福昌寺（曹洞宗）の末寺で、天正17年（1589）に代賢和尚が開山となり創建されました。初め梅天寺（島津家久の仏号）、後に天昌寺（同豊久の仏号）と称し、家久・豊久の菩提寺として位置づけられました。

家久は、天正7年（1579）に佐土原城主となり、同15年に急病のため41歳で亡くなりました。その子豊久は、関ヶ原の戦いで伯父島津義弘の身代わりとして敵中に突入し、31歳の若さで戦死しました。墓所には、家久・豊久一族をはじめ、関ヶ原の戦いで戦死した家臣たちの墓塔が立ち並んでいます。

島津家久・豊久公墓二基(市史跡)



こたじんじゃ

⑤ 巨田神社

こたじんじゃほんでん

📷 巨田神社本殿（国重要文化財）

巨田神社は、古くは巨田八幡と称し、田島庄の鎮守として崇敬されていました。本殿は三間社流造りで、南九州では数少ない中世建築の遺構であり、県内では最古のものになります。昭和56年の大改修に伴い発見された棟札により、天文19年（1550）の建築であると考えられています。残された棟札によって後世の修理の歴史が分かるということで、22枚の棟札も国の重要文化財となっています。

また、左右の摂社若宮社と今宮社は、一間社流造り、とち葺きの屋根で、本殿同様貴重な建築物として、県有形文化財に指定されています。



こたいけのかもあみりょう

📷 巨田池の鴨網猟（県無形民俗文化財）

古くから伝えられる狩猟法で、越網とも呼ばれています。巨田池から飛び立つ鴨を「坪」と呼ばれる丘陵の猟場で待ちうけ、Y字型をした竹と木の内枠に網を張った用具を投げ上げて捕らえるもので、毎年11月15日から2月15日までの猟期にのみ行われています。

同様の猟法は、全国でも巨田池と石川県加賀市の片野池の2箇所しかなく、貴重な伝統猟法として県の無形民俗文化財に指定されています。



しょうか「きゅうさかもとけ」

⑥ 商家「旧阪本家」（市有形文化財）

阪本家は、江戸時代から続く味噌・醤油醸造及び刻煙草の販売を営む商家です。この界隈は、高麗町と呼ばれ、佐土原城下の商人町として、短冊状に街路が形成されていました。

この建物は、明治38年（1905）に建築された、重層入母屋造りの平入り2階建て、1階の玄関土間、屋根瓦の「平」の屋号、大棟の鬼瓦に残る「木瓜」の家紋など、随所に商家の遺風をとどめています。明治期の姿を残す貴重な憩いの景観として、宮崎市景観重要建造物にも指定されています。



広瀬地区

ひさみねかんのんどう

⑦ 久峰観音堂

日向七堂伽藍の1つで、大悲山補陀洛院久峰寺と称し、百済の官人日羅の開基といわれています。

中世以来、熊野の修験道が盛んな場所で、現在も境内に明応3年（1494）銘の五輪塔や天文4年（1535）銘の板碑などが残されています。

江戸時代には、都於郡の黒貫寺（現西都市）の末寺となり、佐土原藩から観音領10石を拝領していました。雨乞祈禱など護摩修法を行い、恵日には藩から役人数人が泊り込みで派遣されていました。

明治7年（1874）の黒貫寺焼失に伴い、本尊聖観音とともに観音堂が黒貫寺に移されたため、ここには富田村（現新富町）伝宗寺の聖観音と建物を譲り受け、現在に至っています。



久峰観音堂の仁王像

そがどんのはか

⑧ 曾我どんの墓

田島地区の南方丘陵上に「曾我殿の墓」と呼ばれる石塔9基が残されています。「曾我殿」と言えば、建久4年（1193）5月に、曾我十郎・五郎兄弟が富士野の狩場で父の敵であった工藤祐経を討ち果たした話が有名ですが、この石塔群は曾我兄弟にまつわる物ではなく、田島氏に関する石塔ではないかと考えられています。

伊東祐時の四男祐明は、蒙古襲来をきっかけに、すでに伊東氏所領であった田島荘（現在の田島周辺）に下向し、田島氏を称しました。

田島伊東氏関係の石塔は、大光寺の敷地内にもありますが、同様に、この9基の石塔群についても、鎌倉から南北朝期における田島伊東氏について知ることのできる貴重な文化財となっています。



さどわらじゅうろくれっしのはか

⑨ 佐土原十六烈士の墓

貞享5年（1688）3月19日、遠州灘を通り江戸へ向かう佐土原藩の御手船が嵐に遭いました。沈没の危険にさらされ、やむを得ず「荷打ち」（荷を海に投じること）し、全員無事で伊豆下田港に漂着しました。

宰領河越久兵衛、河越太兵衛、成田小左衛門はその責任をとり自害。船頭権三郎も「荷打ち」を命じた責任を感じて割腹して自害し、他の船員12名もこれに殉じました。

下田の大安寺には、このことを示した古文書とともに、16人の墓が建立されています。

一方、佐土原町徳ヶ淵では、何時の頃からか宰領河越家の墓石を中心に、付近の無縁仏の墓石を合わせ、十六烈士の墓として今に下田の思いを語り継いでいます。



ひょうたんじまのさいごうさつせいぞうしょあと

⑩ 瓢箪島の西郷札製造所跡

西南戦争で薩軍が戦費不足解消のために発行した紙幣、いわゆる「西郷札」の製造所が石崎川の瓢箪島（現宮崎県埋蔵文化財センター付近）にあります。

明治10年（1877）6月20日の金札発行の布達以後、10円、5円、1円、50銭、20銭の6種、合計16万円余を印刷したといわれています。通用期限を3年とする不換紙幣でしたので、信用に乏しく、戦後は社会に様々な後遺症を残しました。

那珂地区

びょうどうじあと

⑪ 平等寺跡

現在、東上那珂の平等寺地区にある平等寺観音堂は、建久2年（1191）に創建されたと伝えられる真言宗寺院、日照山平等寺跡になります。

平等寺は、那珂地域の有力寺院で、室町・戦国期には伊東氏と密接な関係にありました。『日向記』には、天正3年（1575）に伊東加賀守の跡目争いが発生した際、その指南役として都於郡（現西都市）の一乗院と対立する様子が記されています。また、江戸時代には、黒貫寺末寺として、佐土原藩から寺領10町余を持つ大寺院として栄えました。

現在は、地区の人々によって本尊千手観音と脇侍毘沙門天・不動明王が祀られ、境内に残る五輪塔などに当時の面影をとどめています。



平等寺観音堂に安置される千手観音像